

館蔵中国書画

臨書・ 倣画の世界

観峰館

令和三年度

夏季平常展

ごあいさつ

観峰館本館五階展示室で、令和三年度夏季平常展「館蔵中国書画―臨書・倣画の世界―」を開催いたします。

書を学ぶとき、手本を写す「臨書」は、避けては通れぬ学習方法です。先人の名跡を、あるいは自らの師匠の字を真似て写すことで、自らの技術を向上させていきます。ただ、書における「臨書」は、ただ形をそっくりに写すことだけを目的とはしていません。「臨書」の目的は、手本の「形」を写しつつ、手本の字が持っている「勢い」や「雰囲気」をも写し取ることにあります。

中国では、このような考え方が、南宋（一一二七―一二七九）の頃には、すでにありました。本展で展示している作品は概ね清時代後期から中華民国初期のもので、これら

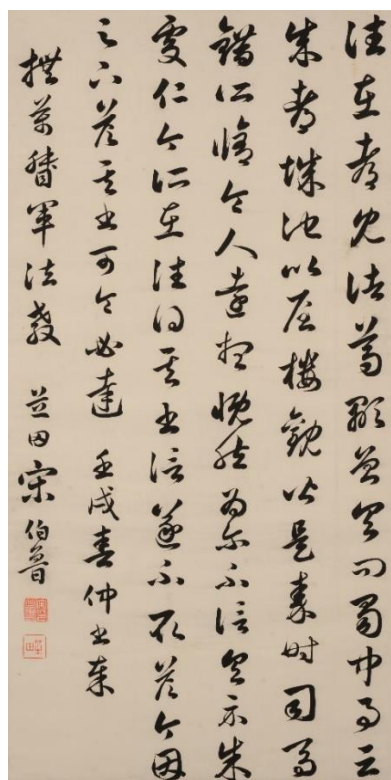
もまた、「勢い」や「雰囲気」を写し取ろうとした作品だと思われまふ。

書家たちは、手本とする作品にどのように「臨む」のでしょうか。その在り方の一端を、本展を通してご覧ください。

また、絵画の領域には、先人の画風に「倣う」ものがあります。これは、手本とした作家の「風」で描いたもの、ということ。本展ではこれを、「臨書」に対応する語として「倣画」と呼んでいます。画家たちが「倣う」画風は、同時代の作家のものから、漠然と「宋人」や「元人」であったりします。同じ画風に倣っているのに、画家が違えば作風も異なります。それらを見比べながら、画家たちの表現を味わって頂ければ幸いです。

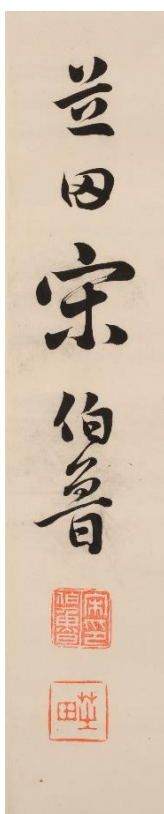
1 宋伯魯（一八五四～一九三二）

「草書臨王羲之成都城池・朱処仁帖軸」 中華民國十一年（一九二二）



【解説】

王羲之（三〇三？～三六一？）が書いた手紙「成都城池帖」と「朱処仁帖」を、中華民国初期に活躍した書家・宋伯魯が臨書した作品。自然な肥瘦を伴う墨線を用いつつ、安定感のある字を形作っている。各字は概ね同程度の大きさにまとめられ、整然とした印象を生んでいる。作者の非凡さが窺える臨書である。

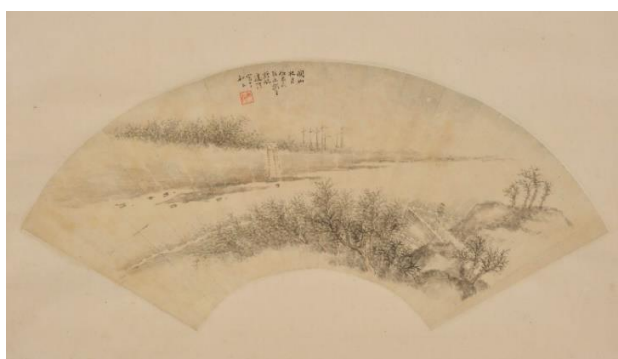


落款拡大

芝田 宋伯魯

2 蓮溪（一八一六～一八八四）

「関山夜月図扇面」 清時代後期



部分拡大

【解説】

清時代後期の僧・蓮溪が、関所のある山々を月が照らしている情景を描いた作品。落款には「宋人の法に倣い、またこれを擬す」とある。具体的な作者・作品を明示しないことから、宋時代の作品からインスピレーションを受けて制作したものであろう。

3 楊庚（生卒年不詳）

「竹林七賢図扇面」制作年不詳



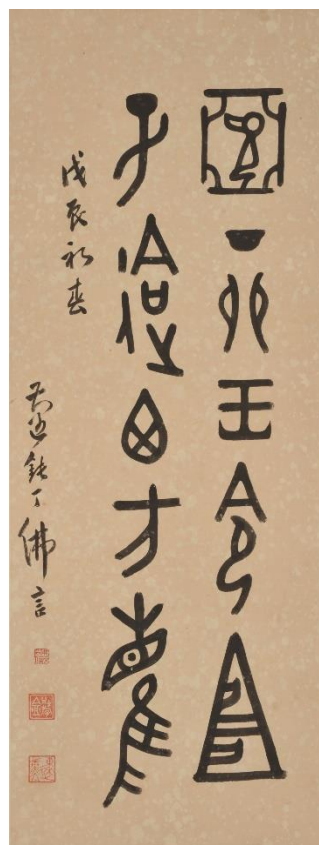
部分拡大

【解説】

竹林の中で文字を書き、楽器を弾く人物たちが描かれている。魏晋時代に俗世間を避け、隠棲した「竹林の七賢」を画題とした作品。落款には「元人の筆意に倣う」とある。作者の目的は、元時代の技法を真似ることではなく、「筆意」すなわち趣や風合いを表現することにあるという。

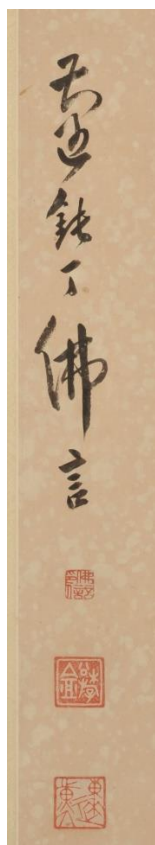
4 丁仏言（一八七八～一九三〇）

「篆書臨戎甬鼎銘軸」中華民国一七年（一九二八）



【解説】

中華民国でジャーナリストとして活躍した丁仏言が、殷末に作られた青銅器「戎甬鼎」の銘文を臨書した作品。筆圧に強弱を加えずに引かれた肥瘦のない線で、青銅器に鑄込まれた文字の姿を書き表している。二行目の一字目「子」の二画目などは、何度か筆を重ねて塗りつぶすことによって書かれている。

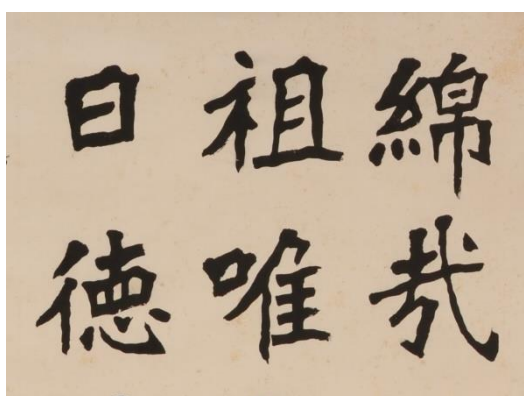
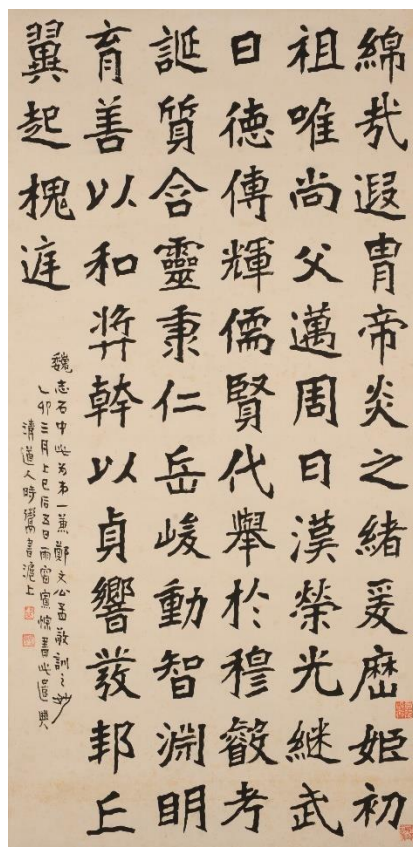


落款拡大

邁 鈍 丁 佛 言

5 李瑞清（一八六七～一九二〇）

「楷書臨崔敬邕墓誌銘軸」 中華民國四年（一九一五）

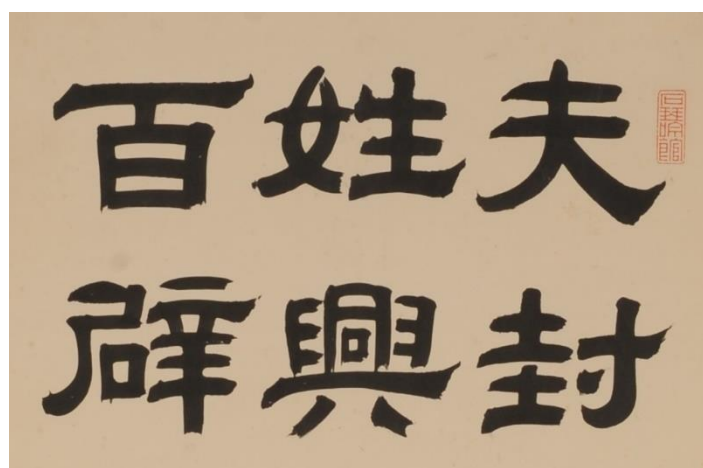
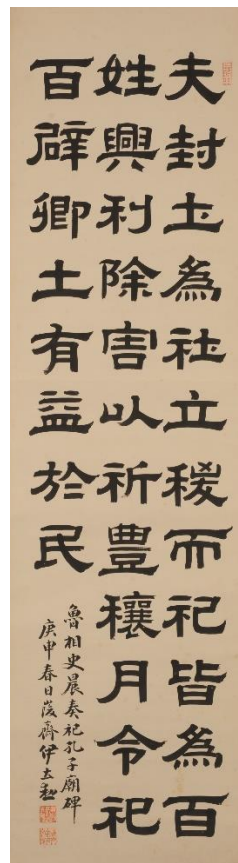


部分（紙面右上部）拡大

【解説】
 中華民国初期に活躍した書家・李瑞清が北魏の「崔敬邕墓誌銘」を臨書した作品。筆を過剰に震わせる書体は「鋸体」と呼ばれ、中華民国初期の上海で流行した。本作も「鋸体」による臨書作品。震える墨線は、手本とした石碑が磨滅している様子を鑑賞者に想起させる。

6 伊立勳（一八五六～一九四二）

「隸書臨史晨前碑軸」 中華民國九年（一九二〇）

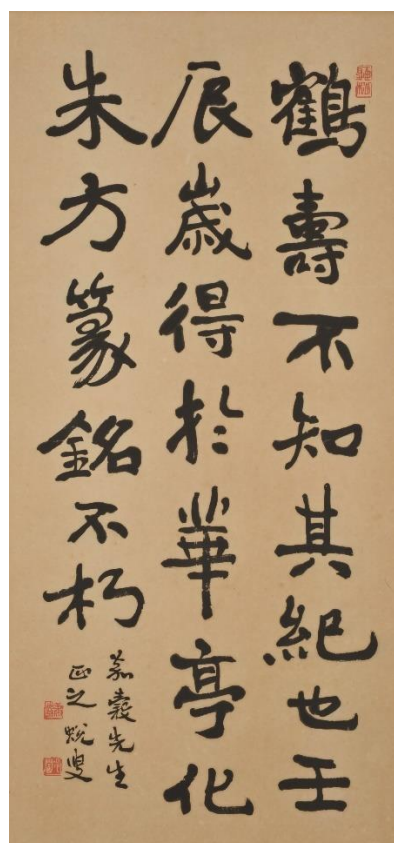


部分（紙面上部）拡大

【解説】
 中華民国初期に活躍した書家・伊立勳が後漢の「史晨碑」を手本とし、その碑陽（碑の表）である「史晨前碑」を臨書した作品。
 波打つようなハライ（波磔）以外は概ね直線で文字が組み立てられている。末端に見えるカスレからは、筆者が力強く筆を運ぶ姿が見えるようである。

7 蕭蛻（一八六三～一九五八）

「楷書臨瘞鶴銘軸」清時代末期～現代



【解説】

清末～現代にかけて活躍した書家・蕭蛻が梁の「瘞鶴銘」を臨書した作品。「瘞鶴銘」は岩肌に刻されたもので、字が傾き、行に歪みが見られる。

本作も、そのような姿を再現するように、字はやや傾いている。また、一行目の「也」や三行目の「不」を小さくし、紙面全体を整然とまとめている。

8 吳讓之（一七七九～一八七〇）

「隸書臨西嶽華山廟碑軸」清時代後期



【解説】

清時代後期を代表する書家の一人、吳讓之（字は熙載）が後漢の「西嶽華山廟碑」を臨書した作品。署名はないが、「吳氏讓之」の印が押されている。やや太めの線で書かれた力強い臨書作品。波打つようなハライ（波磔）では、自然な線の肥瘦を見せる。



印影拡大

上：「吳氏讓之」

下：「晚學生」

9 王連（生卒年不詳）

「老嫗解詩図扇面」 清時代後期



部分拡大

【解説】

清時代後期の画家、王連が「新羅山人本に倣う」として描いた作品。「新羅山人」は清の画家である華嶠（一六八二～一七五五？）のこと。白居易（七七二～八四六）が詩を作る際、年をとった女性に読み聞かせ、理解できるかを確かめ、理解できなかった場合は書き直したという故事を描いている。

10 湯禄名（一八〇四～一八七四）

「倣華嶠人物図扇面」 清時代後期



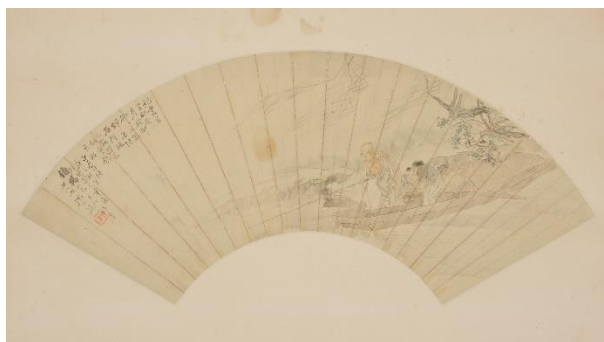
部分拡大

【解説】

清時代後期の画家、湯禄名が「新羅山人華嶠（一六八二～一七五五？）の筆意に倣う」として描いた作品。画面右側には竹林があり、その横に杖を持つ老人と、脇に立つ童子を描く。風が吹き抜けたのか、童子は頭巾を押さえ、老人の服がたなびいている。

11 沈心海（一八五五～一九四一）

「傲華崑人物図扇面」清時代末期 光緒二十六年（一九〇〇）



部分拡大

【解説】

清時代後期の画家、沈心海が「新羅山人の筆意に倣う」として描いた作品。沈心海は著名な画家である錢慧安（一八三三～一九一一）の高弟である。落款には「白石翁詩」とあり、明の沈周（一四二七～一五〇九）の詩を絵画化したもの。釣りをする老人と、童子が二人描かれている。

12 吳穀祥（一八四八～一九〇三）

「松声泉韻図扇面」清時代末期 光緒二十六年（一九〇〇）



部分拡大

【解説】

清時代末期の画家、吳穀祥が「六如と新羅の筆意に倣う」として描いた作品。「六如」とは明の唐寅（一四七〇～一五二四）、「新羅」は清の華嶠（一六八二～一七五五）である。時代の違う古い作例に倣ったと主張するのは、自らの作品を高く価値づける論法の一つであつたのかもしれない。

13 黄山寿（一八五五～一九一九）

「寿星図」清時代末期 光緒三〇年（一九〇四）



【解説】

清時代末期に活躍した黄山寿が華嵩（一六八二～一七五五？）の筆法に倣って白髪白髯の老人を描いた作品。「寿星」とは長寿を司る神の名で、本作の題箋に記載されている。桃の枝を持つことから、西王母の桃を盗んで長寿を得たという東方朔（前一五四～前九三）を描いている可能性もある。



題箋

「黄山寿 寿星」

14 陳康侯（一八六六～一九三七）

「人物図」中華民国一二年（一九二三）

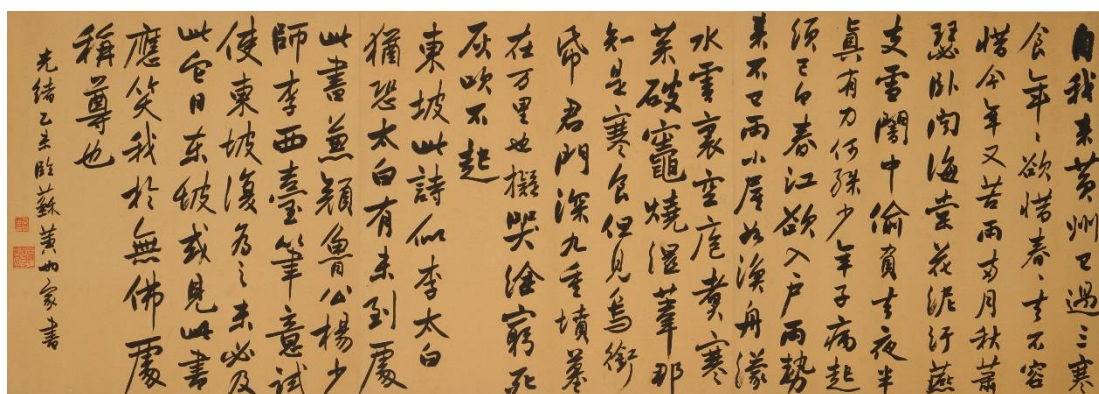


【解説】

清末～中華民国初期に活躍した画家である陳康侯が華嵩（一六八二～一七五五？）の筆意に倣ったという作品。机に突っ伏して眠る老人と、その周囲で遊ぶ子供たちを描く。老人を起こさないように、机に置いたメガネを取ろうとする子供は、悪戯好きな笑顔を見せている。

部分拡大





15 高邕（一八五〇～一九二二）
「行書臨黃州寒食詩卷橫披」

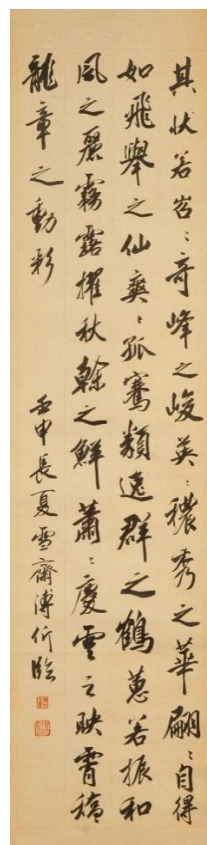
清時代末期

光緒二〇年（一八九五）

【解説】

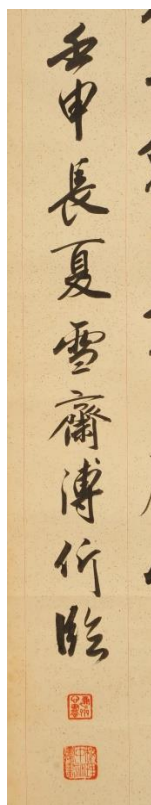
清末～中華民国初期に活躍した書家・高邕が蘇軾（一〇三七～一一〇一）の「黃州寒食詩卷」と、それに付された黃庭堅（一〇四五～一一〇五）の跋文を臨書したものの。字形や行全体が傾いているのは、「黃州寒食詩卷」にも見られる特徴だが、線質については、高邕独特の肥瘦のない直線的なものへと変更されている。

16 愛新覺羅 溥忻（一八九三～一九六六）
「行書臨米芾蘭亭序跋軸」中華民國二十一年（一九三二）



【解説】

清の宗室（皇帝の一族）である溥忻が、黄絹本「蘭亭序」（原本は北京故宮博物院が所蔵）に付される米芾（一〇五一～一一〇七）の跋を臨書したもの。縦長で左へ倒れる字形は、米芾の書における特徴の一つである。手本に似せながら、線に伸びやかさを失わない点に、溥忻の力量が垣間見える。

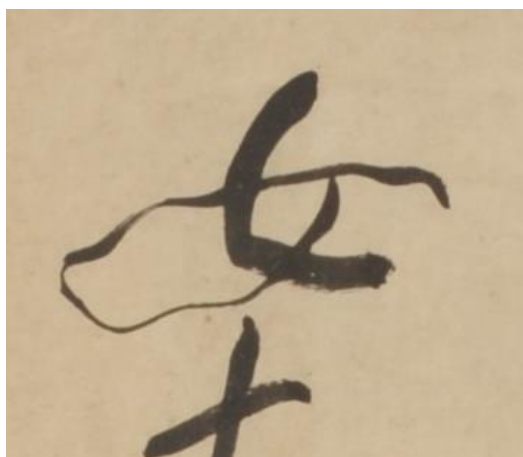
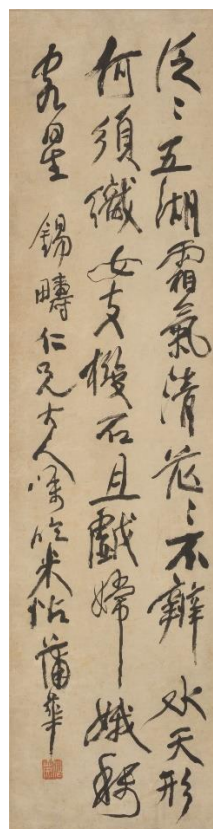


落款拡大

壬申長夏雪齋溥忻臨

17 蒲華（一八三〇～一九二一）

「行書臨米芾蜀素帖軸」清時代後期



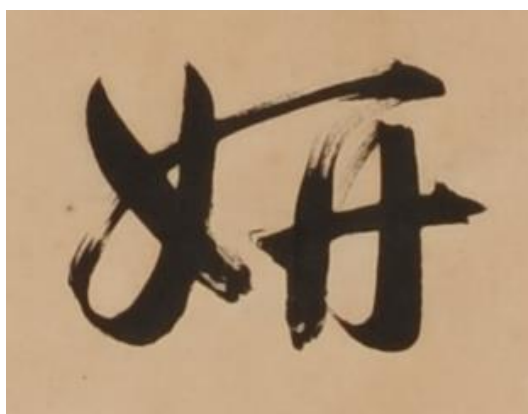
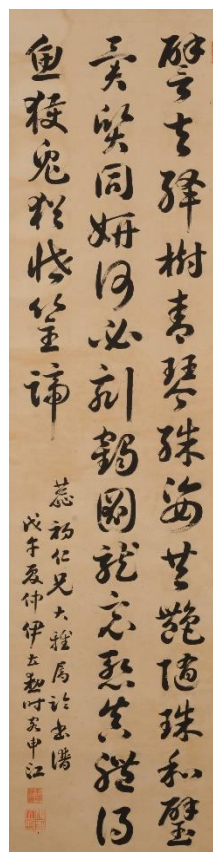
部分（2行目4字目「女」）拡大

【解説】

清時代後期に活躍した書家・蒲華が米芾（一〇五一～一一〇七）の「蜀素帖」を臨書した作品。勢いよくカスレを伴って引かれた墨線は、米芾の書とは異なる、蒲華の書における特質と言ってよいだろう。時折見せる、震えたような線は、何紹基（一七九九～一八七三）などの清朝の書に影響を受けているのかもしれない。

18 伊立勳（一八五六～一九四二）

「草書臨孫過庭書譜軸」中華民国二年（一九三二）



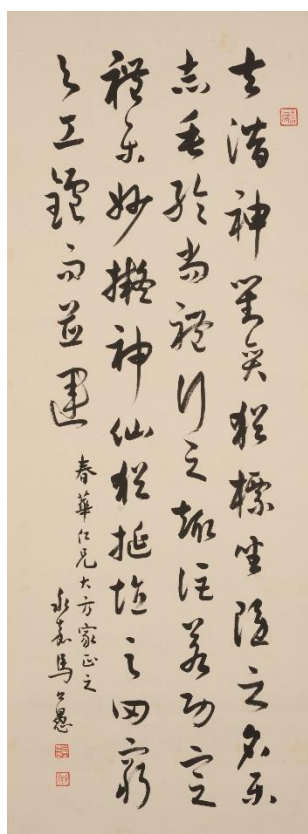
部分（2行目4字目「妍」）拡大

【解説】

中華民国初期に活躍した書家・伊立勳が孫過庭（六四八～七〇三）の「書譜」を臨書したもの。草書体ではあるが、文字を続けて書くことはなく、それぞれ同程度の大きさで独立している。紙面には、楷書体が並んでいるかのような整然さがあり、これは、伊立勳の他作品とも共通する特質でもある。

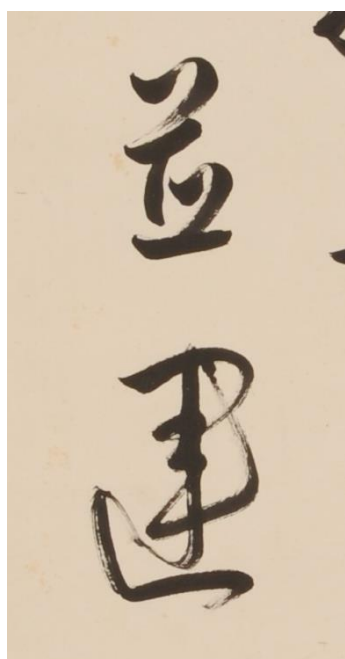
19 馬公愚（一八九〇～一九六八）

「草書臨孫過庭書譜軸」 中華民國



【解説】

中華民国初期に活躍した書家・馬公愚が孫過庭（六四八～七〇三）の「書譜」を臨書したもの。字形における大小や概形の変化、線における墨の潤濁や肥瘦の変化などが多彩でありながら、それらに「わざとらしさ」がなく、極めて自然に行われている。



部分（4行目5～6字目
「並運」）拡大

20 沈振麟（生卒年不詳）

「花卉図団扇」 清時代後期



【解説】

宮廷画家として活躍した沈振麟が「南田翁」こと惲寿平（一六三三～一六九〇）の筆意に倣って描いた作品。葉や花びらのグラデーションや、それぞれのモチーフの形を正確に描くところに、宮廷画家としての力量が表れている。茎は曲線的に描かれ、三つの花がまるで踊っているかのような構図をとっている。

2 1 蓮溪（一八一六～一八八四）

「蘭図」 清時代後期



【解説】

清時代後期の僧・蓮溪が、「南田老人」こと清の初期に活躍した惲寿平（一六三三～一六九〇）の意に倣って描いた作品。細く引かれた墨線と、そこに表れるわずかな濃淡の組み合わせによって、蘭の姿を表現している。また、透明感のある淡墨を用いて肥瘦のある線を引き、岩の厚みを表現する。

2 2 張熊（一八〇三～一八八六）

「花虫図斗方」 清時代後期



部分拡大

【解説】

清時代後期に活躍した張熊が、惲寿平（一六三三～一六九〇）の「設色」（墨だけではなく、色を用いた絵画）に倣って描いた作品。小さな点をいくつも打ち、花や葉、バッタを描き出している。葉には異なる色味を用い、グラデーションによって厚みの変化があるように見える。

23 李野（一八四三～？）

「花卉図斗方」清時代末期 光緒二年（一八九六）



【解説】

清時代後期に画家として活躍した李野が、惲寿平（一六三三～一六九〇）の「粉本」（手本）に倣って描いた作品。ニジミを利用して葉を描き、茎や花は輪郭線と着色により表現する。花が生えている岩場は、カスレを用いた墨の線で描き出される。あらゆる技法を使いこなせる作家の自負が表れているようである。

24 周笠（生卒年不詳）

「花卉図斗方」清時代後期 道光元年（一八二一）



【解説】

清時代後期に画家として活躍した周笠が、「南田翁」惲寿平（一六三三～一六九〇）に擬す」として描いた作品。枝には輪郭線がなく、まっすぐ淀みなく引かれた線で描き出されている。花・葉・枝、いずれも薄い色味で統一され、紙面全体に瀟洒な風合いが漂っている。

25 杜祖培（一八五九～一九三五）

「花卉図団扇」 清時代末期～中華民国初期

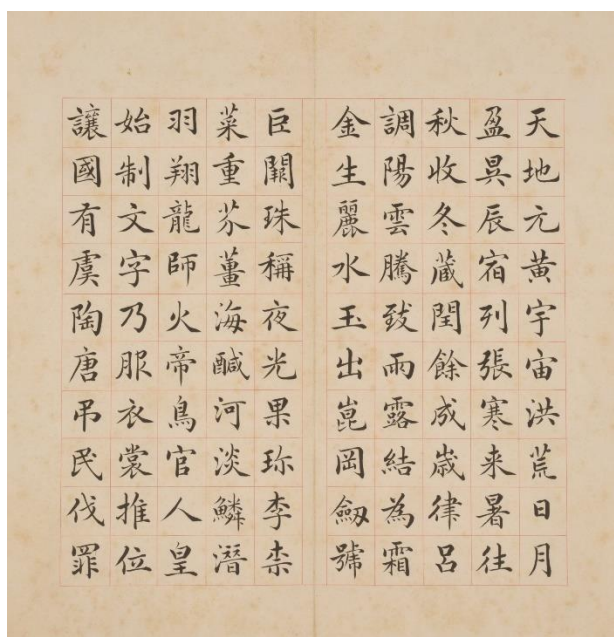


【解説】

清時代後期に活躍した杜祖培による花卉図。落款には「南田粉本 惲寿平（一六三三～一六九〇）の手本を写した」とある。しなやかな曲線で描き出させた枝ぶりと、花弁が幾重にも重なる花の豊かさが見事である。画面右上部の葉は、花や枝よりも手前にあるよう描かれ、紙面の奥行きも表現されている。

26 馮文蔚（一八四一～一八九六）

「楷書臨趙孟頫千字文冊」 清時代末期 光緒二年（一八九五）

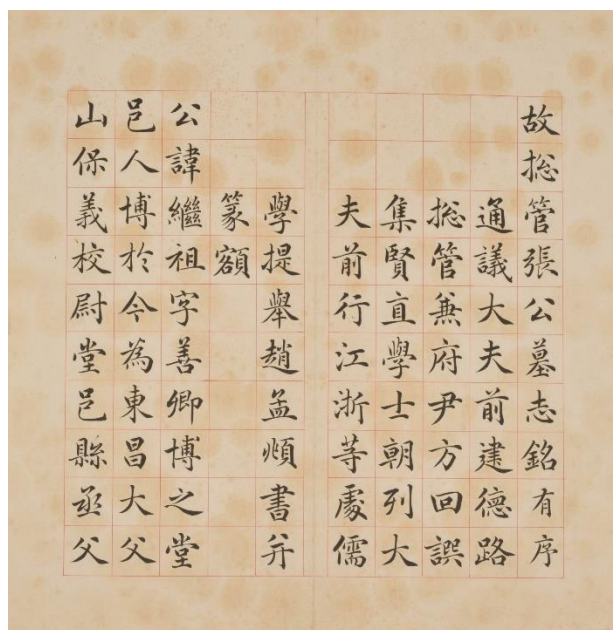


【解説】

清時代の官僚であった馮文蔚が、趙孟頫（一二五四～一三二三）の「千字文」を臨書した作品。やや扁平気味で、ハライを長くとりながら、文字全体のバランスを崩さない点は、趙孟頫の書に見られる特徴を臨書したものだろう。柔らかで自然な肥瘦を持つ線質は、最終頁まで揺らぐことなく終始一貫している。

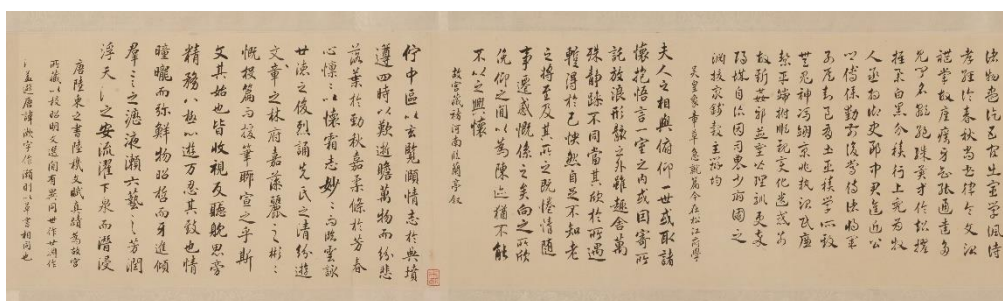
27 馮文蔚（一八四一～一八九六）

「楷書臨趙孟頫張總管墓誌銘冊」清時代末期光緒二十二年（一八九五）



【解説】

清時代の官僚であった馮文蔚が、趙孟頫（一二五四～一三二三）の「張総管墓誌銘」を臨書した作品。もと墓誌銘に刻すために書かれた原稿であり、趙孟頫の書において、公的性の強いものである。時に点画を続けて書く部分もあるが、それによって字が不均衡になることはなく、強い安定感が紙面を支配している。



展示部分

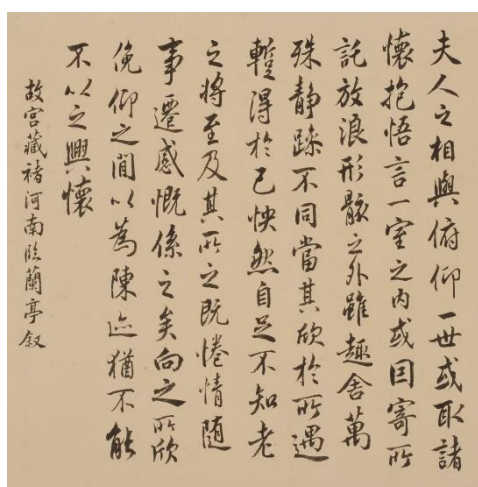
28 馬衡（一八八〇～一九五〇）

「臨書卷」

中華民國三五年（一九四六）

【解説】

北京大学教授・故宮博物院院長を歴任した馬衡による臨書を一卷にまとめたもの。甲骨・金文・石鼓文から蘭亭序・書譜まで九種の作品が臨書されている。いずれも、現在の中国書法史の正統派と位置付けられる作品であり、名跡に学ぼうとする作者の意識が感じられる。



臨「蘭亭序」拡大

館蔵中国書画－臨書・倣画の世界－ 出品リスト

会期：令和3年（2021）6月19日（土）～8月29日（日）

	テーマ	目録番号	作家名（生卒年）	作品名
1	臨書と倣画	4A-4183	宋伯魯（1854～1932）	草書臨王羲之成都城池・朱処仁帖軸
2		4a-2641-3	蓮溪（1816～1884）	関山夜月図扇面
3		z4a-0188-2	楊庚（生卒年不詳）	竹林七賢図扇面
4	石刻の臨書	4A-0232	丁仏言（1878～1930）	篆書臨成甬鼎銘軸
5		4A-1611	李瑞清（1867～1920）	楷書臨崔敬邕墓誌銘軸
6		4A-0094	伊立勲（1856～1942）	隸書臨史晨前碑軸
7		4A-1012-1	蕭蛻（1863～1958）	楷書臨瘞鶴銘軸
8		4A-0870	呉讓之（1779～1870）	隸書臨西嶽華山廟碑軸
9	新羅山人に倣う	z4a-0200-1	王連（生卒年不詳）	老嫗解詩図扇面
10		4a-0626-2	湯禄名（1804～1874）	倣華嶠人物図扇面
11		2F-0037-1	沈心海（1855～1941）	人物図扇面
12		z4a-0183	呉穀祥（1848～1903）	松声泉韻図扇面
13		4a-0613	黄山寿（1855～1919）	東方朔図
14		z4a-0365	陳康侯（1866～1937）	人物図
15	墨跡の臨書	4A-4149	高邕（1850～1921）	行書臨黃州寒食詩卷横披
16		4A-2716	愛新覺羅 溥忻（1893～1966）	行書臨米芾蘭亭序跋軸
17		4A-0224	蒲華（1830～1911）	行書臨米芾蜀素帖軸
18		4A-4288	伊立勲（1856～1942）	草書臨孫過庭書譜軸
19		4A-2286	馬公愚（1890～1968）	草書臨孫過庭書譜軸
20	惲寿平に倣う	5a-0034-2	沈振麟（生卒年不詳）	花卉図团扇
21		4a-3677	蓮溪（1816～1884）	蘭図
22		4a-1343-1	張熊（1803～1886）	花虫図斗方
23		4a-3665-1	李野（1843～？）	花卉図斗方
24		t-0468-1	周笠（生卒年不詳）	花卉図斗方
25		1F-0047-1	杜祖培（1859～1935）	牡丹花卉図
26	名跡を学ぶ	書冊-C-003-1	馮文蔚（1841～1896）	楷書臨趙孟頫千字文・張総管墓誌銘
27		書冊-C-003-2	馮文蔚（1841～1896）	楷書臨趙孟頫千字文・張総管墓誌銘
28		巻-書-020	馬衡（1880～1950）	臨書巻

令和3年(2021)6月19日 発行

編 集

公益財団法人日本習字教育財団 観峰館

所在地

〒529-1421滋賀県東近江市五個荘竜田町136

TEL 0748-48-4141 FAX 0748-48-5475

<https://kampokan.com/>